

2025年度土佐中学校 国語A

解答

- 問1 (例) 忍者たちに会いたくてわくわくする気持ち。(20字)
問2 エ 問3 イ 問4 ウ 問5 ア 問6 オ 問7 エ
問8 (例) 大人に近づき、空想を現実のように見られなくなった。(25字)
問9 オ
問10 a勇(ましい) b採用 c牛乳 d興味 e念頭
問11 Aガミガミ B四方八方 Cペコペコ
問12 (1) 目にあまる (2) 目をぬすむ (3) 目をかける (4) 目に浮かぶ
(5) 目をほそめる

解説

問1

「心情」を問うタイプの問題です。心情描写のパターンはおおむね3パターン。

①直接記述 (例)「メロスは激怒した。」

②発言や行動・様子 (例)「メロスは『私はおこっている』と言った。」「メロスは王をにらみつけた。」

③情景描写 (例)「空には太陽が地上を焼き尽くさんばかりに燃えさかっていた。」

今回は最も基本的な①だけでいけます。傍線部のポイントは「がまんしきれなくなり」のところで
すね。凡太にはこれまで「がまん」してきたやりたいたいことがある。それが何かを書ければ答えとして
はOKです。

まずは「二」のまとまりの8行目

しかし凡太の、一度でいいから忍者たちに会ってみたいと思う願望は消えなかった。

同じく12～15行目

(ひよっとすると、あそこで彼等は修行しているかもしれない)

そんな想像が凡太の胸に起り、もう、どうしようもないほどわくわくするのである。

はい、以上ですね。凡太は「忍者たちに会いたい」と思っていた。それを考えると「わくわくする」
わけです。これを文字数条件に合うようまとめればOKです。

問2

「こちらは一見すると心情を答えるですが…よく見ると選択肢の全てが「〜ことを恐ろしく思っている。」という形になっています。だからこれは心情そのもの（＝恐ろしく思っている）は聞いていない、その心情を引き起す「きっかけ」の方を答えなきやいけないんです。傍線部を中心に書いていきましょう。

畑の上に広がる空は、もはや暮れはじめていたが…

この記述から、**出発してずいぶん時間が経っていることがわかります。ずいぶん遠くまで来てしまっている。**小学生にとってはそれ自体不安でしょう。それに**夜が近づいている。**そのまま夜になって真っ暗になっちゃたら「恐ろしい」ですよ。

山はまだまだ遠く、一向に近くならなかった。

家からは遠く離れてしまった。でも**目的地もまだまだ遠い。**出発したときの「わくわくする気持ち（問1）」は次第に薄れて、このまま**目的地に向かうこと**にためらいが生まれてきているわけです。そういう心情に合う選択肢は「エ」が適切でしょう。

問3

理由説明型の問題ですが、人物の行動についての理由説明の場合、大抵は**実質的には心情問題と考**えて差し支えありません。今回は父親の心情をたどっていけば答えにたどりつくはず。傍線部の直前に直接描写があります。

彼自身も子供の時、大人には決して見えないものを見たことが幾度もあった。（中略）大

人たちはその話を信じてくれず、信じてくれないだけでなく、しかられた記憶がある。あ

れはもう遠い昔の思い出だが、その思い出は今でも懐かしかった。

ポイントは「彼自身『も』」です。「も」は並列を表す助詞で「（〜だけでなく）○○も」という意味を自動的に含むんです。ここでは当然「**凡太だけでなく**（彼（＝父親）自身も）」です。父親は自分と**凡太を重ねている**んです。父親は**凡太と同様に「大人には決して見えないものを見た」経験があり、そのことを「今でも懐かし」く思っている**んですね。

一方、傍線部の直後の内容にも注目しましょう。

父親は母親に向かって、それ以上、**息子の夢をぶちこわさない**よう目で合図した。

「息子の夢」というのは「**大人には決して見えないものを見ること**」の喜び、おどろき、わくわくする気持ち…まとめて言えば「**高揚感**」とでも表現するのがいいでしょう。父親はそれを「ぶちこわしたくないんです。一旦整理しましょう。」

- 凡太は「大人には決して見えないものを見ること」に高揚感を感じている。
- 凡太の思いと父親の思い出は重なっている。

- 父親は凡太の高揚感を損ないたくないと考えている。

以上のポイントを満たす選択肢は「イ」が適切でしょう。

なお、ここでいう「大人には決して見えないもの」というのは（主にテレビで見た内容をもとにした）空想・想像のことでしょう。子供向けのテレビ番組というのは、大人にとっては子供じみた作り事に過ぎない内容でも、子供にとっては現実同様、いえむしろ現実以上に強い印象をもってありありと感じられるものですよ。

問4

まずは凡太の「報告」の内容を確認しましょう。傍線部④と傍線部⑤の間の記述がそれです。

丘にはブルドーザーが一台、おき忘れられていて、つむじ風が小さなたつまきを起していた。凡太はまたしても見たのである。冬の夕暮、だあれもいない、この真茶色の丘にくるくると砂ぼこりが巻きあがり、その砂ぼこりのなかに驚くべし、クラゲのような形をした円盤が舞いおりつつあるのを。

円盤はまるで無重力の物体のように地上からのメートルほどの高さで停止していた。すべてがテレビ映画「インベーダー」で凡太が知っているのとそっくりの形と動きとを示していた。

（略）

彼はふたたび望遠鏡に目をあてた。黄色い砂ぼこりは消え、一台のブルドーザーのほかに、真茶色の丘には人影は全くなかった。テレビによれば円盤は特殊な装置により地下にもぐり込み、乗組員もそれとともに姿を消すのであった。

これを踏まえて選択肢を検討していくわけですが、設問の中にちょっと気になる表現がありますね。そう、『語り手』も確かに「そうだと認めるもの」という言葉です。ここで問3の解説を確認してください。凡太には「大人には決して見えないもの」（テレビから生まれた）空想・想像」が見えている。それは凡太には現実同様あるいは現実以上にありありと感ぜられるものだけけど、「大人」である語り手の視点からは当然ながら現実とは認められない。だからそれは答えから外してね。ということですよ。

引用部の中に現れる「円盤」は、凡太が見た映画に「そっくり」なもの。おまけに「無重力の物体のように」空中に静止していたり、瞬時に見えなくなったりしている。これは現実中存在するものではなく、あくまで凡太が空想・想像したものと考えてるのが自然です。

改めて方針を確認しましょう。

- 本文の描写と明らかに食い違うものは除外
- テレビをもとにした凡太の空想と思われるものは除外

以上をふまえて各選択肢を検討します。

選択肢アの「円盤」は先に述べた通り現実のものとは考えられませんのでこれはダメ。

選択肢イも「円盤」がダメだし、そもそも「円盤が地下にもぐりこんで〜」というのは本文中でもテレビで見た内容として述べているだけ。ここで凡太が「見た」と主張しているわけではありません。

選択肢ウについて。「小さなたつまき」が起こって、「砂ぼこり」が舞い上がったのは本文の記述に合いますし、非現実的な現象でもありません。事実と考えてよいでしょう。

「円盤」自体は先に述べたように空想でしょうが、この選択肢では「凡太には」「本物の円盤のようなものが」「見えていた」と書いてあるだけで、**円盤が実在するとは主張していません**。「凡太にはそう思えた」というだけです。というわけでこの選択肢は答として悪くないです。

選択肢エはダメ。本文中で凡太が「見た」とあるのは「**円盤が舞いおりつつある**」ところまで。地上に停止したところまでは見てはいけません。

選択肢オもダメですね。「宇宙人」は選択肢イの解説内容と同じくテレビの中だけに出てきている話です。凡太がここで「見た」わけではありません。

問5

これも心情問題ですが、まずは傍線部の内容を検討しましょう。「いかにも情けない」という記述、これ自体がそもそも心情描写です。「**心情**」に対しては「**きっかけ**」を考える。ここでは

- **「何がどう情けないのか」**

を考えておきましょう。傍線部の直前の母親の発言についての描写がヒントになります。

「ほんとに、もういい加減にしてちょうだい」

晩ご飯の支度に忙しい母親は…

母親は「忙しい」んですね。そんな中で凡太が語った内容（＝問4で見た「驚くべき報告」）を聞いて「いい加減にしてほしい」と思っている。これは傍線部の「情けない」と重なる気持ちでしょう。また、「いい加減にしてほしい」という言い方には「**初めてのことではない**」という意味も含まれていますね。なんども同じようなことを繰り返しているから「いい加減にしてー」となるわけです。そうすると母親が情けなく感じているのは

- **凡太がたびたび空想を信じ込んで語ること**

だと考えられます。

もう少し傍線部の検討を続けましょう。「ふかいため息をかえしただけ」という表現もちょっと気になります。他の反応もありうるのに、それをしなかった。そういうふうに解釈できます。ではそのあり得た他の反応とはなにか。ここでは直後の父親についての描写がヒントになります。

父親でさえ、面倒くさそうに夕刊をひろげながら（略）一向に興味のない顔つきをした
にすぎなかった。

「興味のない顔つき」、裏返せば「興味がある反応」ではなかった、ということですね。凡太の話に興味を持って聞いたり、何か質問したり、といった反応もあり得るのに、父親も、母親もそうしなかった、**興味を持たなかった**、ということですよ。

まとめてみましょう。ポイントは以下のようになります

- 母親は凡太が空想について繰り返し語り続けることを情けなく思っている。
- 忙しい中空想の話をされることを不快に思っている。
- 凡太の話の内容には興味がなく、好意的に反応する気もない。

これらをふまえた選択肢は「ア」が適切ですね。

問6

欠文中の表現をまずはチェック「もはやくだれ一人として頼れぬ身となった」という表現からは「**もともとは頼れる可能性のある人がいたが、その可能性がなくなった**」ということが読み取れます。ではその頼れたかもしれない人とはだれか。本文に出てくるなかでは父親・母親・そして級友です。問5で見たように両親には相手にされず、級友たちも凡太の話に興味をもってくれない、それで「だれ一人として頼れぬ身」になったわけです。級友の反応について述べているのは【オ】の直前部です。

問7

傍線部の前後を参照しましょう。

(略) 凡太はむかしの自分はふしぎだったなあどつくづく思う。大人になるということは、ふしぎなことをもう見られなくなるのかなのかと考える。

ここから見えてくるポイントは2点

- 「むかしの自分」は「ふしぎ」だった＝「ふしぎなこと」を見られた。
- 「むかしの自分」は「大人」になっていなかった。

ここでいう「ふしぎなこと」というのは「これまでずっと見てきた「空想・想像」のことですよね。「むかしの自分」はまだ子供で、(テレビをもとにした)「空想・想像」を見られた」＝「現実のように、あるいは現実以上にはありありと感じられた」ということです。

以上をふまえて選択肢を選びましょう。

問8

この問題で聞いていることは、ほぼ問7の裏返しですよ。選択問題か、記述式かというだけの違いです。一応傍線部、少し前から引用してみておきましょう。

六年生になった凡太は(略)もう昔のように空飛ぶ円盤をそこに見ることはない。夕暮

れの斜面に忍者たちを発見するようになんともなくなった。(略)

大人になるということは、ふしぎなことをもう見られなくなるのかなのかと考える。(略)

あの円盤を見た丘の方角に目をむけると、丸い白いものがゆっくり空に飛んでいくのが突然、見えてきた。それは白い風船にすぎなかった。

かつて「小さなたつまき」の中に現実にはありえない「円盤」を見た凡太が、いまでは「白い風船」をただの「白い風船」としか見られなくなっている。ふしぎなこと＝空想を現実のようにとらえることが、もうできなくなっているわけです。というわけでポイント。

- 今の凡太は成長し、「大人」に近づいている。
- 現実と空想の区別を明確につけられるようになっていく。

「本文中の語句を用いて」の指定を踏まえて解答例を仕上げていきます。より本文中の語句に沿うなら「大人になりつつあり、ふしぎなことをもう見られなくなった」という答えもありますが、さすがにちよつとそのまますぎる気もします。

記述の特徴についての問題。この手のやつは消去法が有効です。各選択肢を順に見ていきましよう。まず選択肢Aについて、文章冒頭部を引用します。

おじさんにも君たちと同じぐらいの一人息子がいる。名前をそのまま、**ここ**で使いたいのだが、使われるのはイヤだと当人が言うから凡太ということにしておこう。

たしかに「おじさん」は出てきますが、その「おじさん」が語りかけている「君たち」は「おいやめい」のことではなく、**新聞の読者のこと**ですね。**リード文**（＝**問題文のはじめに置かれる、導入や説明のための文**）も**ヒントになる**ので、ちゃんと読まなきゃダメですよ。「おいやめい」に話しているなら、わざわざ本名とは別の名前を使うはずがないですよ。凡太（仮）は自分の本名がそのまま新聞紙上で使われるのが「イヤ」なんでしょう。というわけでこの**選択肢は不適切**です。

続いて**選択肢イ**について。この文章の**主人公**（＝**物語の中心にいる人物**）は「**凡太**」です。それに「**主人公**」が「**作中世界の全容を知る神の視座にある**」というのも変な話ですね。「**作中世界の全容を知る語り手**」というのは小説によく用いられる手法ではありますが、「**全容を知る語り手**」は**普通、作品中に登場する「誰か」ではない**。

例えば「**桃太郎**」のお話。「**むかしむかしあるところに、おじさんとおばあさんがすんでおりました。**」と語っているのはおじいさんでもおばあさんでも、もちろん**桃太郎**でも、**イヌサルキジ**でもましてや鬼でもない、よくわからない「**誰か**」です。こういうのが「**全容を知る語り手**」です。というわけでこの**選択肢もダメ**ですね。

次に**選択肢ウ**。**選択肢ア**でも見たように、**まとめ**「**二**」の「**おじさん**」は**凡太の父親**です。この**選択肢もダメ**。

選択肢エ。話が進むにつれて**視点**が**凡太の側**に寄ってきているのは確かですが、「**三**」の**凡太は客観的に見れば空想に過ぎない「円盤」の存在を信じ込んで興奮しています。「冷静」な立場とは言い難い**。それに「**父親や母親、級友たち**」を**冷静に観察しているような描写もありません**。この**選択肢もダメ**そう。と、いうわけで…。

選択肢オが**正解**ですね。基本的に**語り手**（この「**語り手**」が「**二**」から一貫して「**おじさん**」＝**父親**）なの**か**は**ちょっと断言しにくい**んですが…は**凡太を外側から見**て**描写**していますが、**問8**の解説で引用した部分など、**一部凡太の心情を直接語る部分**があります。

問10～12

漢字・語句・慣用句の問題。基本的にすべて平易なものですが、それぞれの語の意味について、きちんと辞書的に説明できるか・自分の言葉として使いこなせるか、確認しておきましょうね。わかっているつもり**の言葉**でも「**じゃあきちんと説明**してみて」と言われると**意外に難しい**ものです。